TAKE FREE

良い循環をつくる。

エコツー 100

エコムつうしん 100号 ＜記念特別号③＞

社会にも、社員にとっても、もっといい会社に

令和の時代となり、気候変動や経済格差といった様々な社会課題が取り沙汰されています。我々民間企業にも、こうした課題に向き合う態度が求められるようになっています。98 号から展開した特別バージョンも、今号が最終号。日々の業務は多忙ですが、エコツーはこれからも社員の皆さまが何かを考えるきっかけになることを目指します。

●代表のメッセージ　●これからも どうぞよろしく。　●エコツーのこれまで(3)

［だから、つくりたい。：矢川 晴一さん］

左「フレンチブルドッグ」2024、右「ねこ」2024／矢川 晴一

TASCぎふ（(公財)岐阜県教育文化財団 岐阜県障がい者芸術文化支援センター）は、障がいのある人を支えるとともに、アートの力を活用して、社会とまじわる場をつくり、育て、障がいのある人の表現と社会参加の可能性を広げることを目指しています。前回に引きつづき、令和5年4月に開所したアートフィールドをご紹介いたしました。

だから、つくりたい。

矢川 晴一さん

音楽活動の日に、ダンスを楽しむ矢川さん(左)と主任の野々村泰徳(右／ののむらやすのり)さん

人懐っこさが表れた彼の作品は、鑑賞者を元気にします。

今号の表紙は、「生活介護事業所アートフィールド」のご利用者である矢川晴一（やがわはるかず）さんの動物の作品を紹介しました。矢川さんが描くのは、折り紙を手でちぎり、台紙に貼っていくちぎり絵。保育園の時に大好きな先生に教えてもらったことがあったそうで、クレヨン画なども描きますが、やっぱりちぎり絵が好きなようです。

彼の作品の特徴は、ちぎり絵に輪郭線を重ねていくところ。1本線で思いに任せて輪郭線を描いていくのですが、折り紙のにぎやかな色彩と黒くて大胆なラインの構成が、彼の作品の持ち味となっています。

また、見聞きしたことに刺激を受け、次々とテーマが変わっていくのも、彼の創作展開の面白いところです。鳥の図鑑を手にすれば、いろいろな鳥を描きますし、ハンバーグなどの食べ物ばかりを描いていたといったブームもあったそうです。

作品「だるま」。見ると元気になる矢川さんの作品にはファンがつき、購入希望者が増えました。

下描きの上にのり付けした色紙を貼り、その上にもう一度のりを塗布するのが矢川さん流。乾燥後に、輪郭線を描いていきます。

彼は人一倍ものをつくることが大好き。折り紙とのりを入れたかばんを手放さず、毎日創作しているので、利用開始数カ月で作品の数は122 枚にもなりました。下描きを家で済ませてくることもあるそうで、好きなことにはまっすぐに取り組む直向きさを持ち合わせています。

オンラインで実施した取材中も、最初は緊張していましたが、だんだん楽しくなったのか、同席した森真紀主任への無邪気な戯れがとまらなくなってしまいました。そんなふうに人懐っこくて、好奇心が旺盛な矢川さんの作品は、鑑賞する者をニコニコさせる力を持っています。

エコツー 100
令和7年4月発行

発　行：エコムカワムラ株式会社
岐阜県安八郡輪之内町里85番地の3
TEL 0584-68-2033 (代)
制　作：エコツー編集部（いしいデザイン）ishiidesign@outlook.com

バックナンバー

エコツーのこれまで（3）

「ふくし」を意識せざるを得なくなった。

かつては地域・家庭・職場などで、支え合いの機能が存在していました。今では、高齢化や人口減少によりこうした結びつきが弱まり、「お互いさま」の気持ちで支え合うことが難しくなっています。これは、立場や所属、世代に関わりなく、誰にとっても避けて通れない課題であることが見えてきました。

第３期

福祉の視点を取り入れた／83 号～ 100 号（2019 ～）

地域の実情を知るにつれ、福祉の動きが盛んになってきていることに気付かされました。コロナ禍を経験したことで、エコツーはローカル色・福祉色を強めた内容へと向かいます。さらに、冊子での紹介だけでなく、取材を通してつながった団体への支援・協力を展開していきます。

VOL.83（2019 年 10 月発行）

「パラリンアート」がテーマ。TASC ぎふ（岐阜県障がい者芸術文化支援センター）を取材し、福祉マインドとセンスに富んだ活動内容に共感。

ここが知りたいエコムちゃん

TASC ぎふの取材を通して、言葉選びの難しさを知りました。たとえば「障害者」は、「害」の否定的なイメージを和らげるために「障がい者」と表記する動きが広がっています。

ロバのあしあと

後に「こどもがセンター」に発展する「たけはなこども食堂」を紹介しました。ボランティアの高校生が「バイトより楽しい」と話していました。

■VOL.88（2021 年 2 月発行）／89（2021 年 8 月発行）（リモート取材号）

新型コロナウイルスに流行により、発行休止の事態に。88 号、89 号「コロナ禍で、どうしてる？」はリモート取材を実施し、発行にこぎつけました。

VOL.92（2022 年 9 月発行）／96（2024 年 4 月発行）「みのる西美濃！」

西美濃地域の特徴を探す取材。歴史的・地理的に見て、重要な位置にあることが浮き彫りになりました。

VOL.92「子ども歌舞伎」

垂井町に伝わる超・本格的な子ども歌舞伎を紹介。660 年以上続く垂井曳山祭りの一幕です。

VOL.96「輪之内町って、どんなまち」

過去には 10 年に一度のペースで水害が発生していた輪之内町。この地域の根付く特殊な文化は、文化庁も注目しています。

表紙・裏表紙の変遷

VOL.84（2019 年 12 月発行）～「障がい者によるアート作品」

83 号で TASC ぎふ（岐阜障がい者芸術文化支援センター）を紹介。その取材をきっかけに、表紙にて同センターでアーカイブされた作品を掲載。使用料を支払っています。

VOL.94（2023 年 4 月発行）～「だから、つくりたい。」

表紙アート作品の作者を取材し、裏表紙でプロフィールを紹介するようになりました。関係者の皆さんの熱量に圧倒されます。

■活動に共感し、支援・協力するようになりました

【こどもがセンター】旧オーナー宅（自社物件）を低料金での賃貸。大家さんとして活動を支えます。

【TASC ぎふ（岐阜県障がい者芸術文化支援センター）】エコツー表紙における障がい者アートの起用。

【エコツー♡おもいやり活動】エコツー編集部による児童養護施設退所者（18 歳）への家電贈呈。